



学問による知性

塾長 ^{せいけ} 清家 ^{あつし} 篤

澄んだ空気の中で星空の美しい季節になりました。初日の出を拝みに行かれる方もあるでしょう。空や天体を眺めると、人間の考えや悩みなど小さなものだとも思えてきます。

その毎日見ている空では、朝になると太陽が東から昇り、夕方になると西に沈み、そして夜になると星が北極星を中心に動きます。地球が宇宙の中心で、その周りを太陽や星が動き回るといふ、あのギリシャのプトレマイオスの天動説は、まさにそうした観察にぴったり合致したものであったといえるでしょう。

しかし事実は全く違うものでした。驚くべきことに地球のほうが傾いた地軸の周りを自転し、太陽の周りを一定周期で公転していたのです。このことが、コペルニクス以来の天文学を通じて明らかになりました。

もちろんそれは日々の体験や実感とは大きく異なるものでしたから、最初から受け入れられたわけではありません。よく知られているように

ガリレオなどは異端の説をとる者として、宗教裁判にかけられてしまったほです。

しかし最終的に人は、見たままのものでなく、実感と全く異なるものが真実であることを理解しました。これが知性というものだと思います。このことは他の分野でも同じです。身体のこととは自分がもつともよく知っているかといえそうではなく、医学や生理学といった学問を通じてはじめて正確に理解されます。消費者や企業の行動も、当事者の実感ではなく、経済学の家計行動と企業行動の理論にもとづく実証分析によって客観的に説明されます。

人は宇宙の中のちっぽけな存在ではありませんが、学問を通じてその真理を理解するという無限の知性を持った存在でもあります。『学問のすゝめ』や『文明論之概略』などで繰り返し学問や知性の重要性を説いた福澤先生はこのことをもつともよく理解していた人であったと思います。